

## 〔Ⅱ〕 21世紀の日本社会

二 宮 哲 雄

20世紀後半の社会は、動態的な社会として特徴づけられる。都市化、産業化、高速化、情報化あるいは機械化といった方向性を持つ諸変動が、日本の社会をゆるがせている。これらの諸社会変動の帰結が、21世紀初頭においてなされるであろう。その段階において、それまでの不安定な社会は、安定した社会に変るが、そのときそれまでの時間的なレベルにおける動態性は、空間的なレベルにおける社会内部の諸要因間の動態性に転化する。

21世紀初頭に出現する、かかる安定的社会は、まず、計画的社会としての性格を強く持っているだろう。これは、そのとき資本主義的体制を取っていようと、社会主義的体制を取っていようと同じである。かかる意味においては両体制はきわめて接近する。日本社会において都市と農村は計画的に配置されているであろう。産業上の分業は、地域的にも徹底しているであろう。都市と都市、都市と農村あるいは諸産業体間の交通は高速化しよう。コンピューターがそれぞれの内部においてフルに使用され、またそれぞれを連結してゆく。

ところで、20世紀後半の社会変動が、同時にもたらすものは、社会病理現象であり、公害現象である。21世紀初頭の社会は、これらを排除した、福祉的社会としての性格をつぎに持っていないなければならない。

かかる社会が出現すれば、そこでは「社会計画の論理」が、最も有力な社会の論理となる。この論理構造の中では、従来まで価値の分野に入っていた多くのものが、コンピューターの使用により、削り取られ、科学的手続きの中におりこまれてゆくのではないか。

しかし、20世紀の社会計画論と決定的に異なるのは、その理念に、人間尊重の精神が強く採用されていることであろう。行動計画、集団計画、地域社会計画、あるいは全体社会計画のすべてが、人間性からスタートしなければならない。